

琉球大学学術リポジトリ

ダウン症児に対するオノマトペを利用した補助言語の開発

メタデータ	言語: 出版者: 神園幸郎 公開日: 2009-03-04 キーワード (Ja): ダウン症, 言語治療, コミュニケーション, オノマトペ, 言語発達 キーワード (En): Down's syndrome, speech therapy, communication, onomatopoeia, language development 作成者: 神園, 幸郎, 賤部, 盛久, Kamizono, Sachiro, Takarabe, Morihisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9047

< 研究 1 >

ダウン症児におけるオノマトペの 発生機序

神園幸郎

目的

本研究はダウン症児（以下、DS児と略す）に出現するオノマトペがどのような役割を持ち、発達のどのような特徴があるのかを明らかにするために、認知発達の水準がほぼ等しい精神遅滞児（以下、MR児と略す）と比較検討する。具体的には自由遊び場面で出現するオノマトペの頻度および種類を明らかにし、そしてそれらのオノマトペが如何なる前後関係で出現したかを文脈的にとらえることによってそれらが指示する意味を特定する。さらに、それらのオノマトペがなぜ出現するかについて考察し、オノマトペ発生の背景要因を究明する。また、出現したオノマトペがコミュニケーションにおいてどのような意味をもつかをも併せて検討する。

方法

1. 対象児

村田（1968）によればオノマトペは1歳から2歳にかけての一語発話期に多く出現するとされている。対象児を選定するにあたって、村田の指摘を参考にした。そこで、言語発達年齢とりわけ発語の水準が1歳ないし2歳に相当するDS児を対象児として選定することにした。沖縄県内の幼稚園、小学校の特殊学級そして養護学校に在籍する6歳から10歳の中度精神遅滞のDS児を対

象に遠城寺式乳幼児発達検査, 絵画語い検査, 新版K式発達検査そして田研・田中ビネー知能検査を対象児の実態に即して(必ずしも全員がすべての検査を行えたわけではない)実施し, 発語の水準が1歳から2歳の発達年齢にある対象児を抽出した。さらに, 言語以外の発達領域の発達年齢が2歳台(1歳9カ月~2歳7カ月), 3歳台(3歳7カ月), そして4歳台(4歳2カ月~4歳7カ月)に分け, それぞれA群, B群, そしてC群とした。最終的にDS群はA群が3名, B群が1名, そしてC群が3名の計7名(男: 5名, 女: 2名)になった。

MR群の対象児は上記のテスト・バッテリーによってDS群の言語以外の領域における発達年齢とほぼ対にして抽出された。なお, C群は対象児の選定ミスにより1名少なくなったがDS児との比較検討に支障はないものと考え, あえて追加はしなかった。したがって, MR群の対象児は6名であった。

対象児の内訳はほぼ全対象児に実施できた遠城寺式乳幼児発達検査の結果に基づいて表1に提示してある。なお, その他の検査結果は表1に示した各対象児の発達年齢との間に大きなずれは認められなかった。したがって, 表1の発達年齢に基づいて群間比較を行っても大きな問題はないであろう。

2. 音声および行動の収録

学校や幼稚園の生活の中から, 自由遊びや休み時間などの自由場面における対象児の行動を1場面につき30分間づつ2ないし3日の間隔をおいて2場面収録した。表2にDS群の収録場面を示しておいた。収録場面は原則として第三者(あそび相手の子どもを除く大人や観察者)の介入のない場面に限定し, 収録の際は対象児の行動を制限しないように配慮した。行動はビデオカメラで収録された。音声については対象児の音声を明瞭に収録するために, 対象児にワイヤレス・マイクを装着させ, マイクからの電波をFM受信機で捉えて録音する方法を採用した。

3. トランスクリプトの作成

収録されたテープのうち収録開始から10分間を除いて残り20分間を分析の対象とした。したがって, 対象児あたりの分析対象時間は40分間であった。当該の40分間の行動と音声は逐次, 自作の記録用紙に書き写され, トランスクリプトが作成された。

表1 対象児の内訳

	対象児	年齢	遠城寺式乳幼児分析的発達検査						
			移動 運動	手の 運動	基本的 習慣	対人 関係	発語	言語 理解	
ダウン 症児 群	A1	6:4	1:10	1:10	1:7	1:10	1:3	1:10	
	A2	6:0	3:6	2:7	2:7	1:10	1:1	1:7	
	A3	6:4	2:7	1:10	3:2	2:7	1:3	1:5	
	B1	7:5	4:2	3:6	4:8	2:4	1:10	2:7	
	C1	8:0	4:6	3:10	4:8	3:6	1:11	3:6	
	C2	9:11	4:0	4:4	4:8	4:4	2:0	4:8	
	C3	10:1	4:8	4:4	4:8	4:8	2:0	4:8	
	精神 遅滞 児群	a1	11:0	2:0	1:10	2:2	2:2	1:10	2:3
		a2	6:0	3:0	2:6	2:0	2:5	1:10	2:0
a3		8:0	2:8	2:4	3:6	2:7	1:10	2:4	
b1		5:10	3:9	3:6	3:10	3:6	2:1	2:4	
c1		6:3	3:6	4:2	4:6	4:2	2:4	2:4	
c2		10:7	4:6	4:2	4:2	4:7	2:10	2:10	

表2 DSの収録場面

対象児	場面 1	場面 2
A1	ブロック遊び	箱の中で
A2	平均台遊び	おうちごっこ
A3	飼育舎で	一人遊び
B1	ままごと	いす取りゲーム
C1	犬ごっこ	動物ごっこ
C2	ブランコ	ブランコ
C3	先生ごっこ	ボール遊び

結果

1. オノマトペの出現頻度

オノマトペの判定は、丹野(1981)および天沼(1973)の分類基準を参考にした。一般に、ダウン症児の多くは、構音障害を有しており、本研究における全被験者にもこの特徴が見られた。したがって、対象児の音声は不完全なものが多

く、上記の分類におけるオノマトペと音韻的に一致するものは少なかった。そこで、分類基準におけるオノマトペと音韻的に一致しない音声についても、当該の音声が出現した前後の行動の文脈的把握によって、「あるものの状態およびあるものの発する音」を指示もしくは、そのまま音に写していると思われる場合で、かつ、慣用的なオノマトペと音韻的に類似している音声については、オノマトペと認定した。なお、認定にあたっては、当該の音声が表示する意味について、3名の評定者の全員の判断が一致することを前提とした。

図1はDS群とMR群について、各個人ごとに全発話量に占めるオノマトペの割合を示したものである。DS群におけるC1児の割合が他児に比べて際だって高い値を示している。本児の収録場面では、周囲に動物の遊具が多数置かれており、他児の自由場面とは大きく異なった環境であった。本児の遊びは、小動物選好性ともあいまって、2場面とも”動物ごっこ”に終始し、したがって、動物の鳴き声にまつわるオノマトペが多数を占めることになった。しかしながら、本児のオノマトペの種類は、他児と大きな違いはみられなかったことから、本児の結果は、オノマトペを誘発しやすい場面依存的な特徴によるものとみるべきで、本質的な差異を示すものではないと考えられる。

両群を比較すると、群間に顕著な差は認められず、また、発達的な傾向も読み取れない。全般的に両群ともに全発話量の5～10%程度をオノマトペが占めていることがわかる。

両群とも発達に伴って総発話量は増加し、DS群とMR群の対応する発達水準にある被験児の総発話量はほぼ等しい値を示した。ちなみに、DS群とMR群の発達水準ごとの平均総発話量は次の通りであった。すなわち、DS群では発達年齢の低い順にそれぞれ108語、230語、そして256語であり、他方、MR群では同様な順にそれぞれ101語、248語、そして241語であった。

一般にDS児は認知発達に比べて言語発達が劣ると言われているが、総発話量を指標とする限りでは上述の通り、認知発達が同水準にあるMR児と差はなかった。ただ、語彙量や統語機能面においては、明らかにDS群はMR群に劣っており、とりわけC群において、その傾向が顕著であった。DS児の発語の特徴は同語反復が多く語彙量が少ないことであった。DS児はC3児でわずかに2語発話が見られるものの、発達的に高いC児においてすら1語発話の段階

に留まっている。これに対して、MR群ではA 3児で既に2語発話が認められており、明らかにDS児は認知発達の水準に比べて統語的な発達水準に遅れがあるとみてよいであろう。

語彙や統語面において、DS群は明らかに劣っているにもかかわらず、発話量がMR群と差がないことについては、DS児の語用論的能力との関わりで後述される。

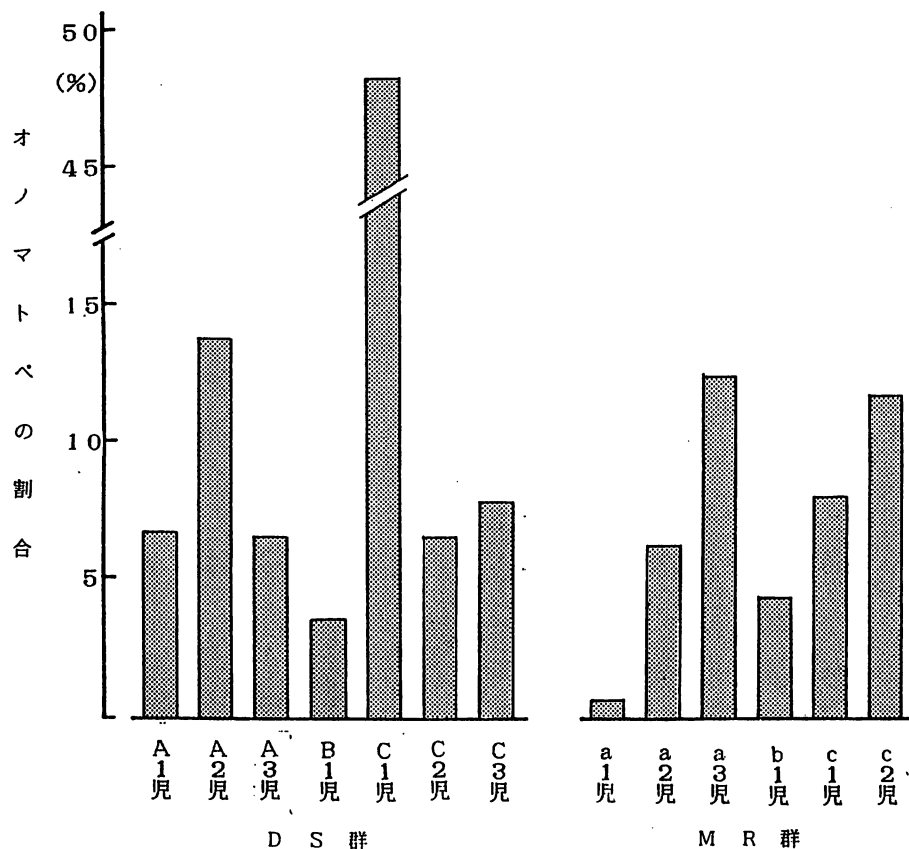


図1 全有意味語に占めるオノマトベの割合

2. オノマトベの音韻分析

次に、オノマトベの音韻的なタイプをみると、両群ともに概して、A児では、/pa/、/ba/といった両唇音を多く含むX:Y型(ex./パーン/、/ブーン/、/チーン/、etc.)がほとんどを占めているのに対して、C児ではXYXY型(/パタパタ/、/ベタベタ/、/ガタガタ/、etc.)の4拍疊語形式が最も多

く、XYt型 (ex. /ペケッ/, /ドロッ/, /パカッ/, etc.), XYn型 (ex. /バタン/, /ドタン/, /ガタン/, etc.), その他の型といったように多様性が認められた。それぞれの型の割合は、慣用語としてのオノマトペの型の出現頻度と類似していた。さらに、C児はA児に比べてオノマトペの音調、音の強調、そしてリズムといった超分節的な要素の多用も特徴的であった。他方、発達的に未熟な段階にあるA児のオノマトペは、まだ喃語からの派生の色合いを多く残している。A児において比較的構音の容易な長音の使用頻度が高くなっているのは、彼らの発音技量が未熟であることによるものと解釈できる。DS群のC児では、DS児に特有な構音の不明瞭さは依然として残ってはいるものの、超文節的な要素を駆使しているために、一般言語に比べて比較的オノマトペの明瞭性は高かった。したがって、DS児に出現したオノマトペは構音の発達や認知発達をよく反映しているといえよう。

先述したように総発話量に占めるオノマトペの割合は発達的に違いは認められなかったものの、オノマトペの型や構音上の特徴については明らかな発達差があるといえよう。

3. コミュニケーションにおけるオノマトペの役割

出現したオノマトペがコミュニケーションにおいてどのような機能をはたしているかをみるために、若葉ら (1975)の行動機能的分類に基づいてオノマトペの分類を行った。

分類項目の定義は次の通りである。

1) 社会的言語行動：言語によって他者との対人関係が成立している。

(1) 自発的発話：他者からの言語的働きかけは先行せずに自ら話しかけたもの。

(2) 応答的発話：他者からの言語的働きかけに応答して発したもの。

2) 自己中心的音声言語行動：音声言語を発してはいるが、他者への働きかけや、他者からの応答を期待せずなされるもの。

3) 認定不能：音声言語行動であるが、1) 2) のいずれであるのかははっきり認定できないもの。

図2は、オノマトペを上記の定義に基づいて分類した結果をDS群とMR群について個人ごとに示したものである。

先に指摘したように、総発話量に占めるオノマトペの割合に発達変化は認められなかったが、オノマトペの実数は発達的に増加していることを示している。

D S群は応答語としてのオノマトペがA児からすでにみられ、発達水準が高くなるにつれてその数が増加している。とりわけ、C児では自発語としてのオノマトペも増し、オノマトペが社会的言語行動として機能していることがわかる。このように、D S群ではオノマトペの機能が発達的な変化を示したが、M R群ではどの発達水準においても自己中心語が大半を占め、発達的な特徴は認められなかった。

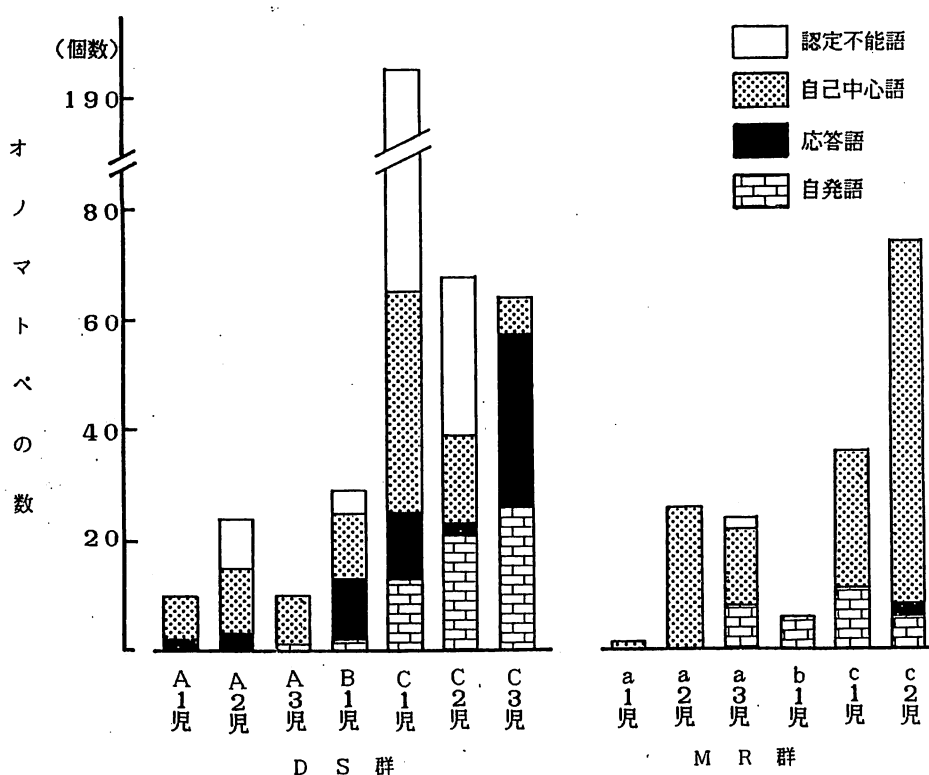


図2 オノマトペのコミュニケーション機能

図3はD S群のオノマトペのうち、その指示する意味を同定できなかったものについて、上記の社会的言語行動に基づく機能分類を行った結果である。図2の結果と同様にこの種のオノマトペも発達年齢が高いC児では他者とのやり取りの場面で使用されていることがわかる。ところで、第3者にオノマト

べの意味が理解されない場合というのは、話し手と聞き手の両者では意味の伝達が行われているが、第3者には了解できないという場合と、話し手と聞き手の両者に意味のやり取りは行われていないものの、話者からの言語刺激に対して、音声や身振りで反応するといったコミュニケーションの表層形態のみを保持している、いわゆる、疑似コミュニケーション (pseudo-communication) の場合のいずれかであろう。この疑似コミュニケーションは、DS児では日常よく観察されることではあるが、図3で示

したオノマトペが仮にこの種のものであったとしても、原初的ではあるが、コミュニケーションにおける語用論的な理解が成立しているとみることができる。C児はコミュニケーションの手段として、オノマトペを有効に利用しているといえるであろう。

次に、明らかに同一の事柄および事象を表していると思われるオノマトペを分析してみた。類義語として使用されたオノマトペが指示する意味の種類数と、類義語としてのオノマトペの種類数(延べ数)を、DS群とMR群の対応する個人ごとに示したのが表3である。表から明らかのように、圧倒的にDS児の類義語の量が多いことがわかる。特に、C児においては、1つの

指示対象について、なんと18種類もの異なるオノマトペの音声を用いている者もあり、更に、これらのオノマトペが交信活動に多用されていた。こうした結果からも、DS児がコミュニケーションにオノマトペを有効に活用しようとする意図が汲み取れる。

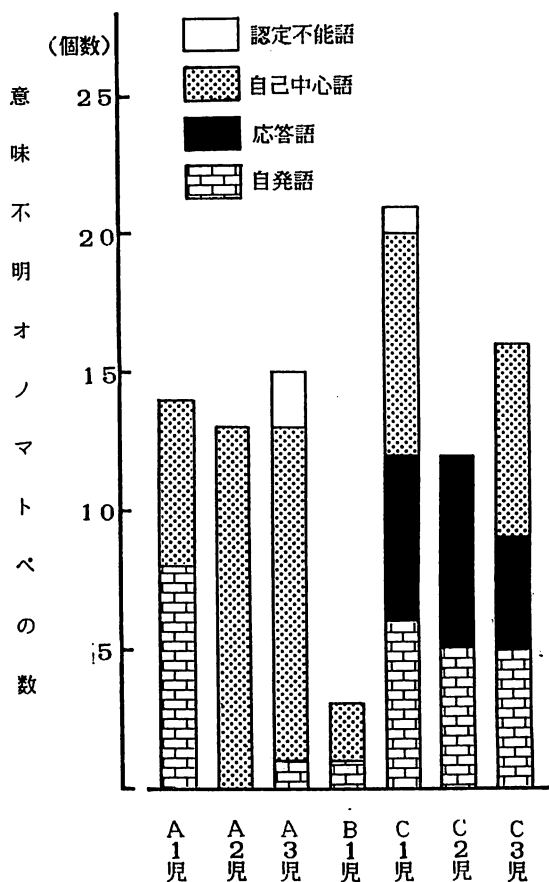


図3 意味不明オノマトペのコミュニケーション機能

表3 類義語としてのオノマトペ

DOWN	A 1	A 2	A 3	B 1	C 1	C 2	C 3
意味の種類	2	3	1	4	6	6	7
オノマトペの種類	4	13	3	15	55	30	30

M R	a 1	a 2	a 3	b 1	c 1	c 2
意味の種類	0	2	2	0	3	1
オノマトペの種類	0	5	5	0	9	7

表4は、DS児に出現したオノマトペを以下の基準で分類し、各個人ごとに示したものである。

- A：動作や状況を説明するもの
- B：じぶんや他者の動作によって生じる音
- C：物の発する音
- D：人の声
- E：動物の声
- F：その他（A-Eのどちらかはっきりしないもの。他者の発したオノマトペを受けたもの。）

Aは、いわゆる擬態語に相当し、BおよびCは、擬音語、DとEは、擬声語に相当する。擬態語と擬音語の生成の背景となる認知的機能には、異なったメカニズムが存在するものと考えられる。つまり、擬音語は、その指示する音が外界に存在するのに対して、擬態語の場合は指示する音が存在しないという点で、その表象形態および象徴機能との関係で大きく異なった背景を持つものと考えられる。一般に、擬態語は擬音語に比べて、表象水準の質的な違いがあり、表象の発達を顕著に反映する側面があるものと考えられる。

こうした観点で、表4を見ると、C児、とりわけC3児における擬態語の種類

表4 DS群におけるオノマトペの種類

対象児	A	B	C	D	E	F	種類
A1		倒れる ぶつかる 唾を吐く		泣き真似		叩く	5
A2	じゃんけん	拍手 かむ音	車の走る音 車の飛ぶ音	咳の真似	犬		7
A3	回転	息 回転音	車の警笛 車の飛ぶ音 合体の音 車の走る音		にわとり		8
B	投げる	転がる音 かむ音	笛の音 終わりの合図 走る合図 ピストルの音	恐怖の声 吐く音	犬 猫 にわとり 怪獣	おなか	14
C1	飛ぶ 投げる	かむ音	合図 B. G. M 汽車 笛の音	あくび	犬 やぎ 猫		11
C2	満腹	叩く 拍手	スイッチの音 汽車 ホッチキス音 笛の音 ブザーの音	泣き真似	犬の吠え声 犬の息	おなか	13
C3	手を下ろす ずっこける 回す 怒っている ボール投げ チリを捨てる 立つこと	叩く 拍手	正解の合図 誤答の合図 起立の合図 笛の音 ブザーの合図 スイッチ音 車の警笛 走る合図				17

A : 動作や状況を説明するもの B : 自分や他者の動作によって生じる音
C : 物の発する音 D : 人の声 E : 動物の声 F : その他

が他児に比べて多く、表象機能の質的な水準の高さが伺われる。特に注目されるのは、状態の表象に加えて、自己の内的状態（“怒っている”）の表象にまで及んでいることである。さらに、擬音語についても、特に、ものの発する音（C）が発達とともに多くなり、物質世界との多様な関わりが多くなっていることを示している。

以下、各個人が生成した具体的なオノマトペを吟味することにする。

C 1 児は、猫の鳴き声を数種類の意味づけをして使用している。たとえば、甘えた声で教師に擦り寄りながら／ニャー／、／ニャーニャ／、手を押しやりながら（こっちに来るなの意）／ミャオー／、／ニャオー／と／オー／の音にストレスを置いて発音する。また、犬の場合でも、その吠え声／ワウワウ／が、他児に対して怒った時には歯を見せながら／ウー／となる。C 2 児では、さらに微妙な表現が可能となり、四つ這いになり、舌を出して／ハッハッ／（犬の息の意）、「猫ちゃんネンネして」とのTの指示に対して、頭を振りながら／ニャッ／と拒否の表現を行う。さらに、C 3 児では、一緒に遊んでいた子が行ってしまったことにすねて／ビービー／（行っちゃだめの意）、他児が本児のおもちゃを取ろうとしているのに対して／ビビー／（取っちゃだめ）、さらに、おやつのスプーンを他児に配るのか聞く為の質問の場合にも／ビビー（語尾の音調を高くして）／、また、他児が隣の子を叩くのを見て、手を交差して×（バツ）をしながら／ビビー（だめの意）／と表現する。このように、動物の鳴き声やブザーやチャイムの音を指示するオノマトペが、本来の意味から離れての特定の意味を指示するものとして使用され始める。こうした新たな意味の抽象化は、対象児が置かれている状況、例えば、動物ごっこやゲーム遊びといった場面で、子どもの興味や関心の対象となるオノマトペに対して起こるようである。例えば、問いかけに対する返辞が、動物遊びの場面では、／ニャン／、／ワン／となり、ゲーム遊びでは／ビー／、また、拒否の発話意図は、動物遊びでは／ニャオー／、／ウー／がゲーム遊びの文脈では／ビビー／といったように変化する。つまり、自らの発話意図が現在進行中の遊びの文脈に即したオノマトペに翻訳されていることを示している。こうしたことは、彼らの対人関係の良好性に裏打ちされた発話意図の旺盛さを示すものとして興味深い。

考察

D S群とMR群の対象児は、言語の表出および理解の発達を除く他の領域の発達年齢についてそれぞれ対にされているが、言語発達については両群に大きな違いが存在している。つまり、D S群においては言語理解の発達年齢に比べて発語の発達が著しく遅滞し、特にC児においては1歳6カ月から2歳8カ月のズレがあった。一方MR群ではこうしたズレは存在せず、言語理解と発達年齢はほぼ同程度であった。D S群においてオノマトペが質的に高い言語運用の様相を示すのは上述した言語理解と発語の発達のズレに起因する可能性が考えられる。

ところで、健常児においては1歳から2歳にかけて多くのオノマトペが出現する。こうしたオノマトペの出現の背景には、村田(1968)も指摘しているように、幼児の興味、関心の増大に伴って自らの欲求を伝達する意欲や意図は高まるものの、伝達手段としての音声言語のレパートリーが充分でないという”需給のアンバランス”状態があり、この状態を緩和するため、あるいは、音声言語の不十分さを補完するための手段として、身振りや表情などの非言語的情報伝達手段に加えて、オノマトペが使われるようになると考えられる。さらに、この時期は、母親から幼児に向けて発せられるオノマトペを多く含んだ”育児語”が活発になる。このことも幼児がオノマトペを使用する援助として機能すると思われる。

D S児は、一般に2語発話の獲得に大きな壁を持つと言われている。1語発話と違って2語発話を産出するには、行為とその対象の意味が理解できた上に、両者の関係性についての理解も必要になる。したがって、1語発話の産出とは質的に異なる認知構造を前提とすることになる。本実験で対象としたD S児も2語発話の段階には到達しておらず、表出レベルでの言語発達は、1歳台に留まっている。これに対して、表出言語以外の認知発達は、加齢とともに発達しているために、先述したように言語発達と認知発達の差は発達年齢が高くなるにつれて大きくなる。この現象は先に指摘した1歳台の健常幼児と類似した様相を呈しており、D S児におけるオノマトペの発生とその運用様式の機序として健常幼児の場合と同様な解釈が可能であろう。ただ、健常幼児と違うの

は言語以外の認知発達が充実しているために、1歳台の健常幼児における要求行動と4歳台におけるそれは質的に大きな違いがあり、当然のことながらオノマトペの運用面における機能の違いをもたらすことになる。DS群のC児における社会的言語行動としてのオノマトペの割合が高いのは、そうした認知水準の発達に裏打ちされた対人接触や対社会的関わりの豊富さが、交信活動や談話への適用といったオノマトペの運用面における付加的な機能充実をもたらしたためであると考えることができる。こうした特性は、DS群に特有な現象とみることができるであろう。これに対して、MR群のオノマトペは、C児においてすら、専ら独語としての自己中心語に終始し、談話のようなコミュニケーションとしての機能を有していなかった。MR群はB児からすでに2語発話期に達しており、要求伝達に関して、オノマトペに依存しなくても済むような状態になっている公算が強い。もし、そうだとすれば、MR群のオノマトペがDS群のように付加的な機能充実に向かわないのは、当然であるといえるかもしれない。

ところで、なぜオノマトペがDS児の交信手段として積極的に使用されるようになるのだろうか。

一般に、オノマトペを構成する音は喃語との音韻的連続性を持ち、構音が容易である。さらに、オノマトペの中には、疊語形式の音連鎖を持つものが多く、音韻的冗長性が高いために音連鎖の保持が容易である。こうしたオノマトペの分節的な特徴に加えて、それらが表出される際の音調やストレスといった超分節的な素性が豊富で、かつ、リズムックであるという特徴を有している。こうしたオノマトペの音韻的な特徴は構音障害を持ち、さらに、聴覚-音声系の機能障害を指摘されているDS児にとって、構音の容易さをもたらしていると思われる。事実、DS児は、成人語の比較的短い語を音声模倣する場合であっても音の省略が生じるのに対して、モーラ数の多いオノマトペでもほとんど省略が起らないという指摘がなされている（大貝, 1985）。

ところで、オノマトペは音声そのものが帯びている性質が直接、ないしは象徴的なやり方で意味を伝える側面がある。言語音の直接伝達性あるいは象徴性は、従来から音象徴として知られてきた現象であり、オノマトペはこの音象徴性が高いことが指摘されている（川田, 1988）。この音象徴は、「鳴り響く意

味」とも形容され、音声そのものが指示対象に直接的、直観的印象を与える働きを担うとされている。したがって、オノマトペはイメージ喚起のポテンシャルが高く（芋阪, 1986）聞く者の感性にじかに訴え、一気に核心に迫らせる（川田, 1988）といった、情報伝達力の高いことばである。こうしたオノマトペの特徴は概念の抽象化能力の乏しいDS児にとって意味理解を促進させるように機能するものと予想される。

言語研究においては、語音と意味の関係は恣意的であるために（Saussure, 1959）記号論的な接近が主になる。一方、オノマトペでは音と意味の有契的な関係が存在するために、単に記号論的な視座のみでオノマトペの指示する意味の本質に迫ることは難しいと考える。そこで、オノマトペの音声の変化とその指示する意味の関係を音象徴という観点から捉えてみることにする。

まず、前出の動物の鳴き声についてのオノマトペで、甘えた声での／ニャー／、／ワンワン／が、“こっちに来るな”との意味で／ニャオー／、／ウオンウオン／と変化する。つまり、通常の鳴き声が拒否の意を伝える場合には、／〇／音が挿入される。／〇／音は、大きいもの、重いもの、強いもの、といった音象徴性を持つと言われている。こうした音象徴性を用いることによって、拒否の意図の強さを表現しているとみることができる。また、音韻変化による音象徴性に加えて、／ビビビビー／のように同音の反復によって、拒否の大きさ強さを表現するといった別種の音象徴的特徴もみられた。この現象と関連して、音韻のような分節的素性に加えて、音調やリズムや強調といった超分節的要素も意味の弁別素性を表すものとして随所にみられた。例えば、前出の例で、愛着行動に伴うオノマトペと拒否の意図を表すオノマトペ、質問の意味を表すオノマトペは分節的には全く同じ素性を持つが（ビビー）、超分節的素性は、それぞれ異なっていた。こうした特性は、オノマトペの産出のみならず、分節的には、不明瞭で奇異であるような音連鎖からなるオノマトペの理解においても、意味の了解を促進するように作用すると思われる。

音象徴性や超分節的素性の活用は幼児期初期からみられ、さらに、異言語間にもある種の普遍性が存在するということから、言語経験の問題というよりも、子供が本来持つ性質に帰せられるという指摘がある。言語発達の遅れたDS児においても、この特徴は、明確に保持され、オノマトペの産出と理解の両面にお

いて、有効に援用されていると言えよう。

Lenneberg (1967) は D S 児が音声模倣に困難を示すのは意味理解が難しいためであるとしている。Lennebergの指摘によるならば、一般言語に比べて意味を理解しやすいオノマトペは、とりもなおさず音声模倣は容易になるであろう。前述の大貝 (1985) が指摘した事実はこのようなオノマトペの意味理解の促進性に支えられているのかもしれない。

また、興味深いことにオノマトペを発している時の対象児は、豊かな身振りや表情を随伴していた。オノマトペの意味の伝達には当然こうした非言語的要素もコミュニケーションの媒体として有効に機能し、情報伝達力を高める役割を果たしているはずである。恐らく、オノマトペのリズミカルな音韻構成やオノマトペが表象するイメージの躍動性などが上述した非言語的媒体の背景に存在しているであろうことは容易に想像できる。こうした、非言語的情報伝達手段とオノマトペの関係については今後検討しなければならない

オノマトペの音韻特徴や音象徴のような意味喚起の容易性が D S 児のオノマトペ使用を促進させているとの上述の指摘もさることながら、D S 児のオノマトペの大きな特徴はそれらがコミュニケーションの媒体として使用されることにある。コミュニケーションが成立するためには、送り手と受け手の間に、話題ないしは、心理的”場”の共有が必要である。自己の強い発話要求が生じるということは前提として言うまでもないことであるが、話題の共有、”場”の共有を成立させるためには、その前に”ヒト”と”ヒト”との出会い、つながり、ある種の情緒的な関わりを作らなければならない。言語発達の途上にある幼児の場合には、この”出会い”の関係を醸成するためには、”ヒト”が”ヒト”に新たにかかわる場面においては、認知的側面に訴えるよりも情緒面に訴える方が、関係を切り結ぶ際に有効である。山田(1988)も指摘しているように、まず、”わかる”ことよりも”あう(出合う)”ことが重要である。

この出会いの場면을保持したい時、他者からの問いかけに対してその意図の理解まで達することができない場合にも儀式的な反応を返したり、あるいは他者に対して意味を形成しないある種の音声を自発的に発して他者の注意や関心を引き留めておくといった行為がみられる。先に指摘した D S 児の疑似コミュニケーションはまさにこうした機能を帯びているのであろう。さらに、こ

の疑似コミュニケーションの手段として受けての情緒に訴える力の強いオノマトペが使われているということは、DS児の対人関係の良好性と状況把握の的確性を伺わせる。恐らく、彼らは問いかけられた相手に対して何等かの形で働きかけることが、まずはコミュニケーションの基礎をなす人との関わりを継続させるために必要であることを認識しており、対人関係を形成し保持するうえで相手の情緒に訴える仕方が有効であるとの認識にたつてオノマトペのそうした側面をうまく利用しているものと考えられる。

また、DS児はその場の状況に合わせて適切でかつ有効なオノマトペを選択して使用している（たとえば、拒否をゲーム場面では／ビビー／、動物あそび場面では／ニャオー／といったように）。このことはその場が持つ認知的制約性を的確に把握でき、それらをコミュニケーションに有効に利用できるとの主体側の認識が背景に存在していることが前提となる。そうすると、DS児はコミュニケーションに関するかなり高度な実用論的（語用論的）能力を備えているといわねばならない。DS児におけるコミュニケーションの有効な媒体としてオノマトペが高次の機能をもつのは、背景に上述した能力が存在していることによると考えられる。